

木魚念佛不退圓説上人研究（二）

——隆圓編『近世念佛往生伝』における圓説伝について——

伊藤 正芳

はじめに

往生伝とは、極楽浄土に往生した者の行業等や臨終の際の奇瑞を記した伝記集であるが、そこには往生人に対する顕彰・往生極楽への勧進・結縁等が含まれると共に、編者の意図が込められるものである。

『近世念仏往生伝（諸国見聞近世往生伝）』の編者である順阿隆円（一七五九～一八三四）は、知恩院六役を任じられた上、往生伝や伝書等数多くの著作を残した高僧であることは周知の通りである。『近世念仏往生伝』は、その隆円が「この人物は、念仏によつて極楽往生した人である」と認定した往生人の伝記を収集したものと云えよう。

この『近世念仏往生伝』は文化三年（一八〇六）一月に第一編三巻が上梓され、その後、同五年（一八〇八）九月第二編四巻、文政七年（一八二四）八月三編三巻、同十二年（一八二九）三月第四編三巻、同十三年（一八三〇）七月第五編三巻まで出版され、不退円説はその第二編卷之四に収載されている。これは筆者が拙稿「木魚念佛

不退圓説上人研究（一）¹」で紹介した胎内文書「不退上人像縁起」よりも古く、円説の伝記の中では最も古い伝記となる。

不退円説の先行研究として平祐史氏の論文による次の三論文の著作がある。

「宝暦年中鳥羽法伝寺宗義出入一件について」（竹田聰洲博士還暦記念論集『日本宗教の歴史と民族』隆文館、昭和五十一年十二月）

「『開山不退上人本江山江被召出候問答一件記』の史料的性格について」（『鷹陵史学』第三・四号、昭和五十二年八月）

史料『開山不退上人本江山江被召出候問答一件記』（『鷹陵史学』第三・四号、昭和五十二年八月）

また、この三点は同氏『法然伝承と民間寺院の研究』（思文閣出版、平成二十三年六月）にて「鳥羽法伝寺宗義出入一件」として再録されているが、いずれの論文にも『近世念仏往生伝』所収の円説伝には触れていない。平氏は、「宝暦年中鳥羽法伝寺宗義出入一件について」や「開山不退上人本江山江被召出候問答一件記」の史料的性格についてに於いて、

「（前略）法伝寺触着については、慶応三年に編まれた『続日本高僧伝』巻十に「城州法伝寺沙門円説伝」として、所収されており、宗義安心問題の一件に関しては、

盛唱吉水正流、弾斥邪命説法、寛延二年、徒住鳥羽法伝寺、道光莫掩、四部依慕、宝暦中六群輩、妨難蜂起、法戦一場、無敢抗其鋒、亡何魔属退散、法幡弥盛、緇素欽伏、日課誓受者、一万五千余人也

と紹介されているにすぎない。（中略）勿論、この一件に関する公刊の記録は、先の『続日本高僧伝』に所収されている程度であって、従来の浄土宗の正史に具体的に登場することなく、また、これに関する本格的な調査研

究が試みられた形跡は寡聞にして知らない^②」

等と論じているが、隆円の『近世念仏往生伝』所収の円説伝を未見であるということは、不退円説の研究上画竜点睛を欠くと言わざるを得ない。

三田全信氏は『浄土宗史の新研究』（隆文館、昭和四十六年十一月）「江戸時代の浄土宗の革新的動向」に於いて、江戸中期の専修念仏僧として円説を紹介しており、参考資料として『続日本高僧伝一〇』『近世往生伝二の四』『続台宗学則』を挙げている。

また、道契『続日本高僧伝』の「城州法伝寺沙門円説伝」を見る限り、『近世念仏往生伝』を参照・要約して『続日本高僧伝』を編纂したものであると考えられる。

一、『近世念仏往生伝』の不退円説伝

『近世念仏往生伝』の円説伝全文を紹介し、注釈を入れていきたいと思う。

近世念佛往生傳二編卷之四 十二昏〜十八昏

大阪天満宗金寺圓説和尚（目次）

圓説和尚^③

師諱は円説、字は鈍性、光蓮社触誉不退と号す。江州栗本郡下笠村の人なり。その性篤実慈仁にして、帰仏の

心もツともふかし。八歳（一二二）にして父をうしなひ、そのぼだいのために出家せんことを請ふに、母も師が幼稚の志ざしを感じ、同国南笠村妙楽寺单誉上人に投じて薙染せしむ。志学にして江戸増上寺に掛錫し、自他宗の章疏を研尋して、粗その幽致を究む。かくして十八歳（一七三）のとき思惟すらく、我はじめ出家せしは、父の菩提、自身出離のためなりき。今生空しく過なば、多劫生死の大海に流浪せんこと疑べからず。さるをいたづらに筌蹄をまもりて、かへりて魚兔を忘れんとす。幸に本願に逢へるは曠劫の大慶なり。今生空しく過なば、はたいずれの生を可期せんやと。

遂に両脈稟承のゝち、ひそかに学林をさりて、一挙万里そことなく巡拝せり。或は箱根・立山などの地獄ありといふ所にいたりては、受苦のかなしみをおもひやりて、厭離の便とし、あるは飢て山林に臥し、衣を露霜にしき、しのぶには浄土自然の快樂を念じて欣求の想をます。かく遊方のうち、縁にふれ行化せらるゝに、日課念仏を受るもの三百七十人にあまれり。

まずは諸往生伝の常の如く円説の出自が語られ、出家修学両脈相伝、自己省察、諸国遊歴、厭離穢土欣求浄土、苦修練行、日課誓受の様子が語られている。

享保二十乙卯歳（一七三五）の春本国に帰り、妙楽寺にしてはじめて説法せられしにも、また受化のものそこばくなりき。それより洛に來り、七本松の正覚寺に住持せらるゝ事およそ十一年。長時の日課六万遍三時の勤行あたかも一日のごとし。

その頃随他の勸化を専とするもの盛にして世の人やゝ宗祖の本意を失はんとす。されば師ふかくこれを慨歎し

ておもへらく、祖訓をありのまゝに勸化せんとすれば時機にさかひ、機に順ぜんとすれば仏知見はばかりあり。さらば世をのがれ自行を策勵し、とく浄土に生じて後、還り来りて思ひのまゝに利益せんにはしかじと。

円説二十二歳の頃、近江国に帰り師僧の寺で初めて説法する。その後七本松正覚寺に十一年間住持したとある。『続日本高僧伝』では「正覚寺」としか書かれてないが、『近世念仏往生伝』では七本松（洛西）の正覚寺と明記されている。

正覚寺住持の頃の円説は、「長時の日課六万遍、三時の勤行あたかも一日のごとし」「世をのがれ自行を策勵し」とある。これは所謂閑居念仏であり、出家隠遁の様相である。前述の諸国遊歴等の行動と併せて、これらのことから円説の捨世の姿が見て取れる。また三田全信氏は、前出の著書において円説を捨世派として紹介している。⁽⁴⁾

かくおもひたゝれしかと、瑞夢のことありて、寛延二己未歲（一七四九）の春洛南鳥羽の法伝寺に住せり。しかしより六時の勤行怠りなく、専修一行を弘通し、しきりに随自意の勸諭せられけり。さてぞ京伏見淀、おほよそ其近村の老若男女、渴仰し念仏するもの甚だ多く、法化日々に盛なりし。これひとへに瑞夢に応ぜるゆゑなるべし。

円説三十六歳の春、洛南鳥羽法伝寺の住持となる。後の文にて「師三十六歳にして化門をひらき」とあるが、円説は法伝寺に住して自行化他、即ち遁世の念仏から民衆教化の道に進んだことになる。

されど道高きこと一尺なれば、魔高きこと一丈といへるがごとく、宝暦のはじめにいたり、その勸化をねたみ、妨害をいたすものありて、師の教導邪見にして宗祖の本意にあらずと、曲て本山に訴へ、遂に官庁に聞し、その沙汰におよびぬ。しかれども妖は徳におよばず、邪は正にかたざるのことはりなれば、師の勧誘するところ、仏祖の正意にして、浄家の要義なるむね明らかにはれ、数たびだしたまひて、その私なきこと、白日青天のごとなりしかども、衆の和せざるに機嫌をはばからず。妨害をかうむるの遠慮なきがゆゑに、かゝるあらそひを生ぜるは、出家忍辱の所為にあらずとて、遂に山城一国を警跡せらる。これ師の弘法は正なりといへども、しばらく衆人の妬情をなだめんがために、かくはからはせたまふなるべし。

ここでは円説の法難について述べられているが『続日本高僧伝』の記述では「寶暦中。六群輩。妨難蜂起。法戦一場。無_レ敢抗_レ其鋒。亡_レ何。魔属退散。法幢彌盛⁽⁵⁾」と要略されている。編者の隆円は「師（円説）の行履、今猶人口にのこるといへどもその事実を記せるものなし。このゆゑに其門人の伝ふる」ものを往生人と認定し採択したのである。これは隆円が円説の正統性を認めたことになり、京内にある円説の世評よりも円説の弟子の話を信用し円説を擁護する記述となっているのである。

こゝに於て、師また一錫飄然として諸方に遊履せり。そのとしの夏中は尾中円成寺に寄寓せらる。

尾中円成寺とは、捨世派関通流の祖である関通（一六九六—一七七〇）が住持した寺であり、関通自身が浄土宗律院とした寺である。関通と円説の関係については後述する。

その、ち難波宗金寺にかへりへ宗金寺並に伏見光月庵、師の開基せるところなり。説法教化など盛にして、その化益をかうむる緇素、臨終正念に現瑞を感じて往生せるもの多く聞え、念仏の利益ますます盛なりき。宝暦九年初秋のころより、師病にかゝり、はじめはかるき風の心地と見えしが、日にましたのみすくなく、医薬のしるしもみえざりければ、一心に死をまちて念仏愈らず。廿九日のあした、仏前において殊さらに念仏し、八月朔日弟子等をまねぎ、ねんもごろに遺誠し、同三日の夜戌の刻過るころ、頭北面西に臥し、廿五条を頂戴し、高声念仏百遍ばかり、たちまち虚空を指ざし、見るところあるがごとく、合掌して南無極楽世界阿弥陀仏、南無觀世音ぼさつ蓮台蓮台、南無勢至ぼさつ 善哉善哉と、大音にとなへ、さゝげたる合掌のまゝ息とどまりぬ。時年四十六、法臘三十五、実に宝暦九（一七五九）己卯のとし八月三日なり。近隣の人、寺のうへに紫雲のそびへしを拝し、これ師が往生の瑞ならんと思ひ、いそぎ来りしに、ただ今終りたまへるやうをきゝて、いよいよたふとみけり。師三十六歳にして化門をひらき、四十六歳にして終る。中間わづかに十一年、その中四年は障難ありしかば、ただ七年の間に日課誓受の弟子一万五千貳百人なりき。若長寿ならば、何ぞただこゝにとどまらん、あにをしむべきにあらずや。

ここでは円説の臨終の様子が詳細に紹介され、極楽往生の証である紫雲の瑞相があつたことを記している。又、難波宗金寺（別本には浪華北野宗金寺・佛光山宗金輪寺の記載もあり）は明治の頃に廃寺となつたようである。宗金寺説菩薩音が法伝寺に寄贈した『不退上人一件記』の考察は、円説研究の最終段階にて改めて論究したいと思う。因みに伏見光月庵（光月院）・伏見一念寺・法伝寺等に「伝不退上人の木魚」が現存する。

師障難をかうむられしころ、知恩院の集会堂にこもりて一夜念仏せられけるが、夜ふけ人しづまりて後、大師殿のかたより、しきりに震動し、一道の光明師をてらしければ、掌中あたかも白昼のごとし。随侍の僧ならびに堂司のもの、まのあたり此瑞相を拝して、師の勸化大師の御意にかなへることを信じける。

師のいはく、我身此たびの一大事は出離生死往生極楽なりと。つねに心にかけて大切におもひ、仏の教えに従ひ、すなほに念仏すへきなり。

またいはく、今生のことは何事もなきものなりと、必死と思ひならふべし。天地世界も我も人も衣住食も、皆ことごとくなきものぞとくろえれば、おのづから無常をわすれず、自然と心もとのふなり。とかくものはありおもふより、万事むつかしくなるなり。人もなくわれもむなしと思ひなば、何か此よにうらみあるべき、とよめる古歌をつねに忘るまじなり。

またいはく、弟子等あながち智者学生になりえて、世に知られんとはげむべからず。たとひ其業成ずるとも、遂に名利のなかだちとなりて、一大事をあやまつこと、あたかも石をいだきて淵にいるがごとくならん。ふかく慎み恐るべし。古人のいはく、釈尊の因位も智者学生にてはましまさず、半偈のために身を投ぜし道心者にておはしけりと、されば汝等ただ堅固の念仏者にて、一生を終らんと決心すべし。その決心は念仏の気味覚ゆるにあるなり、円光大師愚痴者の念仏するをたふとみたまひけるなと、ふかくおもふべし。

『知恩院史料集 日鑑篇』に寶暦年間の円説の騒動の記録が数多く収録されているが、この騒動については別の機会に改めて論究する為、今回は割愛させて頂く。

極楽の道一ツのみ覚えよや、よその野山はふみわけずとも、深信といへる僧あり。川崎酉元和尚へ台家の隠者にて専修念仏の人なり、現証往生伝に出たり⁽⁶⁾の弟子なり。或時かたりていはく、先師酉元専修念仏の教廢れしを歎き、弘通のことをいのり奉られし夢に、仏告て今より二十年のゝち一向専修念仏を弘通する二人の僧あらん。その時をまつべしと、のたまふとて、弟子にかたりて、汝等報命あらば、その人に値遇すべしとまうされき。そのゝち二十年ばかりにて、師の念仏弘通したまふにあへりとて、師資の芳契をぞ結ばれける。おもふに二人の導師とは、その一人は関通和尚ならん歟、これ同時の人なればなり。

平氏は前出の論文において、「近在諸民の耳目をそばだてる宗論公事出入に發展した近世浄土宗史上稀なる異議事件の記録である。」「ただ法然の一向専修という廢立の立場を触蒼がどのように理解したかと言うことに帰するのであつて、それによつて社会的にはかなり極端な非妥協的な面があらわれたものと思われ⁽⁷⁾。」と論じているが、同時期同様の妨難に遭っているのが、捨世主義の僧侶達であり、特に有名なのが関通である。不退円説に対しての告発内容は、ほぼ関通の『雲介子関通全集』内でも見受けられるのである。

関通は浄土律の興隆や専修念仏の弘通に尽力した捨世派を代表する高僧である。関通は尾張国の生れで俗姓は横井氏。十三歳の時に一色村西方寺（現円成寺）照蒼靈徹のもとで出家し、十六歳の時江戸増上寺に入つて宗乗・余乗を研鑽する。正徳二年（一七一二）宗戒兩脈を受け、学問を修めて尾張に帰る道中、箱根の関所にて「生死輪廻の関所を打破し礙なく通らん為には、本願名号を手形とするのが最善の手段」と悟り、自らを関通と称した。その後隱世の心が起こり、諸州を七十四日間遊歴する。その後色々と紆余曲折するが、浄土律と専修念仏の教化に努め、祈禱念仏等を随他の念仏として激しく排斥した。その為に種々の妨難に遭い、念仏停止の処分を受けたのである。

ここで井川定慶氏⁽⁸⁾と深貝慈孝氏⁽⁹⁾が『入信院文書』にある『関通不退妄教化』という文献について論証されていることに注目したい。この文献は関通の教化説法に対しての批判書であるが、両氏共に『関通妄教化』と略して、「不退」の文字に関しては論究されていない。しかしながら、「一向専修念仏を弘通する二人の僧あらん」「二人の導師とは、その一人は関通和尚ならん歟、これ同時の人なればなり」の文面を考えるに、「不退」とは不退円説のことであり、『関通不退妄教化』は、関通・不退の二人に対する批判書であると判断出来よう。

また先の関通の略歴で注目したいのは、関通の俗姓が横井氏であることである。拙稿『木魚念佛不退圓説上人研究(一)』で紹介した胎内文書「不退上人像縁起」にて、円説の俗姓が横井氏であることを紹介した。円説と関通の俗姓が同じ横井氏であること、これは偶然の一致であろうか。円説と関通、何らかの血縁関係がある可能性があるが、これに関しては未だ推測の域を出ない。今後、確証が得られる更なる資料の発見が不可欠である。

或時黄檗の任費禪師きたりて、慕直に生死を出離すること、我禪門にしくことなし。さるを散心口称の念仏にて、浄土に往生すること、その理信じがたとしと、まうされしかば、師これがために、大悲本願の深意、諸宗不共の妙旨をとくこと三日のあいだなりき。禪師日々聴聞信受して、はじめて心を西方に帰し、日課念仏三万遍を誓約し、みづから歎じていはく、我幸に報命をたまち、今日此師に逢ひて、かゝる易行の法をきゝえて、順次往生の巨益をうることを、豈曠劫の大慶ならずやとて、専修念仏の行者となりたまひしとぞ。

黄檗の任費禪師とは仁峰元善(一六五八―一七三〇)を指すと思われる。『黄檗文化人名辞典』に「また不退和尚に謁して浄土の宗要を聞き、日課念仏三万遍という⁽¹⁰⁾」の記述がある。

師平素素朴にして華美を好まず、住所を飾らず、廉食を甘んじ、慈味を嗜まず信施を恐れらるゝこと、もツとも切なりしとなん。師の行履、今猶人口にのこるといへども、その事実を記せるものなし。このゆゑに其門人の伝ふところをうつして、こゝにあぐ。

或人評すらく、不退上人は只法あることをしりて、未身あることをしるざるものといふべし。其専修念仏弘通に於る妨害患難にかゝるといへども、その志しなおなお懺然たり。おもふに悲智の居士、宿願輪に駕して来れるものならん、いとたふとひかなと。

また或人問云、師は城州を警跡せられ、法伝寺の世代をはぶかる、その後免許ありしやいかんと。答ていはく、師の没後遺弟本山にもうして、その恩免をこふ。このゆゑに法義において、正しきは論なしといへども、我情のつよきに罪せられしむね、分明なれば、これを官に聞じて其赦をこひ、ながく世代に加へて、彼寺に塔をたつ。これその恩免をかうむられし証なり。

「師平素素朴にして華美を好まず、住所を飾らず、廉食を甘んじ、慈味を嗜まず信施を恐れらるゝこと、もツとも切なりしとなん」とあるが、これはまさしく浄土律の特徴である。『近世念仏往生伝』の円説伝には、関通と同じく捨世主義と浄土律の特徴が色濃く出ているのである。又、円説没後に遺弟が本山に恩免を請い、既に赦免されていることにも留意したい。『近世念仏往生伝』二編の奥書には、

新刻 近世念佛往生伝二編助梓名署^①

○京一心院明誉上人・善導寺真誉上人・善香院仏誉上人・大津大泉寺転誉上人各奉薦触誉不退和尚五十回追孝

○大阪宗金寺相嘗上人・玉円庵智月尼各擬不退上人冥資

官許 文化五年（一八〇八）閏六月七日 同九月粹成

とある。円説の門弟は出生地である滋賀・念仏教化に活躍した京都・法難後移り住んだ大阪を中心に数多くいたようである。今後出来る限り円説に所縁のある寺院の調査を行い、円説の足跡を辿っていきたいと思う。また「彼寺に塔をたつ」とある通り、法伝寺境内には円説の無縫塔が現存している。

二、『近世念仏往生伝』の諸往生伝における円説伝

『近世念仏往生伝』内の他の往生伝から、円説の記述を散見することが出来るので、この機会に紹介させて頂く。（以下、円説に係る部分に傍線を付す。）

近世念佛往生傳二編卷之四

貞月法尼^⑬

法尼貞月は、大坂天満八田五郎左衛門定周が母なり、京都の土本多何がしの女なりしが、その母ふかく三宝を帰依す、これによりていとけなきより、仏道のたふときことを知りて、淨信をおこしてけり、生質柔和正直にして、嫉妬の情うすく、ひろくものをあはれみて、みづから少欲知足なりき、十六歳にて八田氏に嫁し、よく家事をいとなみ、婦道をまもりて貞良なりしが、三十有余にして、その夫身まかりしかば、眼前の無常に驚き、浮世のいとふべきことを知りて、香火の精舎にて剃度法をうけ、これより酒肉五辛をたちて、後世ぼたいのつ

とめねンもころなりき、そのころ不退和尚へ次上の円説上人なり。天満宗金寺にして専修念仏を弘通せらる、法尼はじめて本願念仏の易行なることを領受し、これを信ずることあたかも渴ける人の水を得たるがごとし、こゝに於て剃髮染衣して、専修仏の行者となれり、されば本願の要義をしるさんことをこはれしかば、和尚これをしるし、⑤念仏見利鈔と題してさづけらる、法尼これえて信心弥増なりしが、その書の趣をながく子孫につたへ、みなともに浄土に往生して、ひとしく生死を解脱せんとながふといへり、かつ此むねを定周にもねンもごろに遺託せらる。(後略)

円説の書き記したものととして、『念仏見利鈔』の存在が明らかになった。この『念仏見利鈔(抄)』は、現在二種が大正大学と三康図書館に所蔵されている。いずれ折を見て翻刻して研究する所存である。

近世念佛往生傳三編卷之一

日蓮宗三上人^⑬

(前略) 宝暦年間京極本能寺中の一老僧、名ははばかりてしるさず。ひそかに本願念仏を信受し、日課念仏三万遍誓ひておこたらず。その臨終に仏光を感じし、弟子とゝもに高声念仏しきりなりぬれば、隣房の僧あやしみて、外よりその障子をひらきしに、その光明を拝見し、異香の薫ずるに驚きて、同じく念仏者となれりとなん。その老僧正命終の時、弟子なるものに筆をとらせて、

人目をも涙もいまはとどめ得ず かゝるうれしき弥陀の迎へに

といひすてゝ、高声念仏三十遍ばかり、頭北面西にして合掌みだれず。息たえて後、笑をふくむ事三度なりき。

鳥羽の不退和尚、かの老僧とは和歌の友なりければ、いとたしかなることなり。実に末世出離の現証なりと。その筆記せるものに見えたり。今按るに、関通和尚本願鈔俚語一の巻に、本能寺湛能上人日課三万遍の行者なりとしるせり。さだめて此人なるべし。

ここでは円説は和歌を嗜み、日蓮宗に和歌の友があり、日蓮宗の僧三人が題目ではなく念仏にて往生したと記してある。この往生伝では、本能寺の湛能上人を含む日蓮宗の三人の僧は、円説の念仏教化により本願念仏の信仰者となったと暗に示唆する記述であると言えよう。

近世念佛往生傳五編卷之二

了光信士¹⁾

(前略) 右の事状は、洛南鳥羽法伝寺主、浪華天満宗金寺に留錫の頃、大和屋林兵衛といふ者より、是を伝聞しけるに、猶つまひらかならねば、それがしをして彼妻女に就て委聞せしめ、聞俚を筆記せるなり。されど源吾俄に伝法を信じ、また臨末念仏せしことをとふに、ふつに其故を語らざれば、其妻もこれを知らずとなん。法伝寺主評ずらく、熟おもふに、今年浪華にて源吾が如き神道売講して活業をなすもの数多有しかば、官庁よりこれを制し、速に其業をあらたむべきよし、嚴敷仰出されしことあり。しからば源吾もこれによりて、翻邪帰正せるものか。また彼臨末の有様よりみれば、宿因開発し冥道の呵責を蒙り、先非を悔て言葉をあらため、ひそかに念仏せしより仏勅を得て、死するを知り往生せるやらん。其一生の造罪、或は謗法を活業とし、毒を衆多の愚夫愚婦に流へ、仏壇を破却して、妻女をして懊悩せしむ。生後阿鼻のすもりとならんこと、鏡をかけ

てあらそふべからず。しかるに一朝忽然として、其意業を改るも、かぞふれば十月にみたず。殊にその往過を懺悔せしにもあらず。たとひ密修あるにもせよ、連添ふ妻のふつに知らざるより推せと。其功何ぞ見るにたらん。顕露の称名ただ三十遍斗、病苦にかゝらず坐脱せる事、これ偏に超世大願大悲の善巧にあらずんば、何ぞかゝることわりあらん。謗法闡提回向皆往、たれの罪惡の者か。手を拱して火車の来現をまつことをせん。つとむべし、怠るべからず。(後略)

前略の部分は源兵衛(改名して朝増源吾と名乗る)なる者が、神道売講をもて活業とし謗法仏道の輩であつたが、忽然として改悔念仏し往生人となつたことが記されている。傍線部分はこの往生伝について円説の解釈、後略の部分は隆円の解釈が記されている。

三、『近世念仏往生伝』中の木魚念仏の記述

木魚という法器を用いての念仏、木魚を叩いて念仏を唱える作法は、現在の浄土宗では普通の作法であり、円説が始めたものであるが、江戸期においては異風の作法であつた。拙稿『不退圖説上人研究(一)』にて簡略に紹介したが、木魚古来の使用方法と異なることから、黄檗宗は日本仏教界から異端視され、木魚にて念仏をする不退円説も同様に異端視され拒否されたのである。木魚念仏については別の機会に改めて論ずる為、今回は『近世念仏往生伝』に見られる木魚念仏の記述について紹介させて頂く。

近世念佛往生傳三編卷之三

縁阿慧超上人⁽¹⁵⁾

(前略) ことし五月七日未刻ばかり忽然として、傍人に告ていはく、我明八日には必定往生すべし。されば今はその用意せんとて、みづから浄髪湯あみをなして後、仏前にて一心不乱に念仏して三更にいたれり。さて例のごとく安臥せられしが、八日早暁より起いで、巳刻頃まで勇猛に念仏せらる。(中略) やがて仏前にて木魚うちならし、念仏する事半時ばかりなりしか、そのまゝうつむかるゝとみれば、はや息たえにけり。文政五年壬午五月八日、時年七十三歳なり。(後略)

近世念佛往生傳四編卷之一

得誉本立上人⁽¹⁶⁾

(前略) 「五月」二日朝辰刻看侍のもの異香をきく。其時師いはく、頼てもたのむべきは乃至十念の詞、信じても信ずべきは必得往生の文なり。此文を誦すれば、決定往生なりとて、感涙をそゞぎて御念仏御念仏と申さるゝ故、かたはらより木魚うちならし暫く念仏せり。此時感見ありしなるべし。たづねざりしは念なし。巳半刻筆をとりて、衆生称念必得往生 得誉斯経愚僧花押とかきしるし、これらが我宗の肝要なりとしめされき。(後略)

近世念佛往生傳五編卷之三

高誉深察和尚⁽¹⁷⁾

(前略) 結願の日なればとて、障碍なく成就せし祝のためとて、有信の同行両三人をまねき、齊会をいとなみ、相ともに受用しをはりて、ねもころによるこびをのべて後、なほまた仏前に端座し、同音念仏一会して木魚を

うち収め願以此功德の文をとなへをはりて、低頭平伏のまゝ寂然として声なし。近くよりてこれを見れば合掌みだれず。呼吸既に絶たりけり。時十一月廿三日午正中にて行年七十二なり。(後略)

これらの木魚に関する記述をみるに、江戸後期に入ると木魚念仏に対する拒否反応は、かなり薄まっていることが窺い知ることが出来る。又、隆円は木魚による念仏を異安心として見ていないと言えよう。(三に続く)

註

(1) 拙稿「木魚念佛不退圓説上人研究(1)―不退上人像とその胎内文書について―」(『佛教論叢』第五十四号、二〇一〇)

(2) 平祐史『法然伝承と民間寺院の研究』二二三頁、二四二頁

(3) 『専念寺隆圓上人集』一七九―一八三頁

(4) 三田全信『浄土宗史の新研究』二二八頁

(5) 『大日本佛教全書』一〇四 三二〇頁

(6) 『現証往生伝』卷上(『近世往生伝集成』第一卷 一八一頁)

※ここには円説に関する記述は無いが、西元の行状はまさしく捨世主義のものである。

(7) 平祐史『法然伝承と民間寺院の研究』二二三頁、二二八頁

(8) 井川定慶「江戸時代浄土宗の復古と革新運動」『佐藤博士古希記念 佛教思想論叢』六五六頁

(9) 深貝慈孝『中国浄土教と浄土宗学の研究』六九一頁

- (10) 『黄檗文化人名辞典』二九八頁
- (11) 『専念寺隆圓上人集』二〇四頁
- (12) 『同右』一八三頁
- (13) 『同右』二二八頁
- (14) 『同右』四四〇頁
- (15) 『同右』二七六頁
- (16) 『同右』三二三頁
- (17) 『同右』四五二頁

〈参考文献〉

長谷川匡俊 『近世念仏者集團の行動と思想』 評論社